

Journey to my PhD@York in イギリス／Vol.1

浅野 貴博

はじめに

私は現在、イギリスのイングランド北部にあるヨーク大学（The University of York）の博士課程（PhD）に在籍し、ソーシャルワークの研究をしています。ヨーク大学に留学する以前は、アメリカの中西部に位置するセントルイスにある、ワシントン大学

（Washington University in St.Louis）で、修士号（MSW: Master of Social Work）を取得しました。この連載では、研究のことだけではなく、アメリカ、そしてイギリスでの留学生活についても触れていく予定です。今回は初回ということで、自己紹介も兼ねて、留学する以前のことにについて述べたいと思います。

留学を決意するまで

留学する以前は、対人援助職の養成及び継続研修等を実施する民間機関である、京都国際社会福祉センター（以下、KISWEC）に8年間勤務し、主に、社会福祉士養成課程やソーシャルワーカーの継続研修に携わっていました。その中で出会った、対人援助職を目指す方、現任の対人援助職の方、そしてそれらの方の学びを支援する方々と、'学び'をキーワードに関わる中で得られた様々な経験が、留学という大きな決断をする上で後押ししてくれました。

KISWEC の社会福祉士養成課程は、社会福祉士養成教育のシステムにおいて、「一般養成施設」に分類され、入学してくる方は、1）4年制大学の卒業者（学部・学科は問われません）、そして2）学歴に応じて2～4年の一定の実践経験を持つ者、に分けられます。そのため、4年制大学における社会福祉士養成教育とは異なり、様々なバックグラウンドを持つ、20代から60代、はては70代の方までという幅広い年齢層の方々が、社会福祉士の取得を目指して入学されます。また、KISWEC の社会福祉士養成課程は夜間課程であるため、その受講生の多くは、働きながら通学されます。社会福祉を初めて学ぶだけでなく、10年、20年と社会福祉の現場で様々な実践経験を積んでこられた方も、同じカリキュラムの中で社会福祉を学ぶことになります。私が縁あって、KISWEC に就職した当時は、大学院の修士課程を修了しただけで、社会福祉の現場のことはまるで分かっていなかったのも、受講生の多くが私より年長で、さらに、上述のようにすでに実践経験も豊富な方が少なからずいる中で、援助技術関連の科目を担当するというのは、本当に大変な経験でした。経験のなさを、何とか知識でカバーしようとしていましたが、'実践'という足場のある受講生を前にしては、すぐに底の浅さが露呈されてしまい、自分自身の至らなさに、恥ずかしさや申し訳ない思いを感じながら授業を担当していたことを思い出します。自分には実践という足場がないという思いは、今もなお持ち続けていますが、そうした経験を通して、特に対人援助の分野でよく言われる、「理論と実践の乖離」ということの意味が少しずつ実感できたように思います。

また、上記の社会福祉士養成課程の他に、京都市からの委託研修として、福祉事務所のケースワーカー及びスーパーバイザーに対する研修や、その他の委託研修にも関わり、講師の選定も含めてマネジメントしたり、KISWEC が独自に実施する継続研修・訓練にもスタッフとして関わっていました。KISWEC のように、ソーシャルワーカーの養成と、その後の継続研修の双方を事業として実施する社会福祉関連機関は非常に珍しいと思いますが、私は、そのどちらか一方だけでなく、どちらにも携わることができたおかげで、ソーシャルワーカーの対人援助専門職としての‘学び’に対する問題意識が生まれてきました。

社会福祉分野においては、社会福祉士だけではなく、精神保健福祉士やケアマネジャー等の様々な資格があり、さらに、社会福祉士のキャリアアップの資格として、専門社会福祉士や管理社会福祉士資格ができ、更新等のために、研修の受講が義務化されるという流れがあります。専門職としてのソーシャルワーカーの力量を高めるために、そうした研修を義務化することの意義は一定認めますが、一方で、その労働条件に目をやりますと、給与の低さ、非正規職員の割合の高さなど、非常に厳しい環境の中で、日々サービス利用者と向き合っている現状があります。今もなお、いわゆる座学スタイルで、講師が一方的に知識や情報を伝え、受講生はそれを聞くのみという研修が多い上、それらの研修は、単発で実施されるものがほとんどです。同じ研修を受けても、その研修に満足する人もいれば、「研修なんて受けても時間の無駄」「現場では何の役にも立たない」と切り捨ててしまう人もいますので、受講者の満足度の高い研修を実施することは容易ではありません。しかし、少なくとも、各々の現場で、試行錯誤をしながら支援をしている援助職の気づきを促し、さらに、各々が置かれている現状に対する、様々なレベルでの変化への動機付けが高まるような研修を実施しなければ、研修を受講すること自体が目的化し、研修で学んだことと実践は別という乖離状態が解消するどころか、さらに事態が悪化しかねません。

一方で、KISWEC において、上述のような形で援助職の学びに関わりながら、援助職の人たちにとって‘学ぶ’ということはどういうことなのか？また、援助職として、何かを学んだと認識するのはどのような状況においてなのか？といった疑問が出てきました。単に、研修という枠組みの中だけで、その内容や方法を考えるだけでは不十分なのではないかという問いです。そうした問題意識が、現在の研究に直接つながっています。

援助職としての‘学び’を考える際、資格保持のための義務的な研修のような学びのみに重きが置かれる現状がありますが、そうした学びをフォーマルなものとすると、それ以外のインフォーマルな学びの可能性についても考える必要があると思います。インフォーマルな学びとしては、例えば、職場内・外の援助職同士の自主的な勉強会や集まりなどが挙げられます。さらに、日々支援をする中で、例えば、休憩中に同僚と交わした会話を通して、それまで抱えていた課題に対する気づきが得られるといったことも挙げられます。フォーマルな学びが、社会福祉士会のような職能団体や所属機関・施設の主導によって、事前にシステマティックに計画されたものだとなると、インフォーマルな学びは、それとは別な形、つまり、援助職者自身がイニシアティブをとって学びの場をつくったり、事前の計画なしに起こったりする学びのことです。

しかしながら、フォーマル／インフォーマルな学びという分類は、援助職の学びには、研修のようなフォーマルな学び以外のあり方もあるのではないかという、オルタナティブを提示するためのものであって、様々な学びをどちらかに分類すること自体が目的なのではありません。フォーマルな学びとしての研修において、研修そのものではなく、例えば、研修の間の休憩時間や、研修後に帰途に着く際に、受講生同士で交わした会話から学びが得られるといったこともあるでしょう。また、インフォーマルな学びの例に挙げた、職場内・外の援助職同士の自主的な勉強会や集まりについても、時間の経過の中で、フォーマルな要素が強くなり、参加することが、言わば義務的になるということもあるでしょう。

そうした問題意識の下、現在取り組んでいる博士論文では、インタビュー（フォーカス・グループ及び個別インタビュー）と参与観察等の質的研究方法を用い、ソーシャルワーカーの学びにおいて、フォーマル／インフォーマルな学びそれぞれの果たす役割、そして、ソーシャルワーカーがそのキャリアを通して、継続的に学び続けられるためにはどのような環境が必要なのかについて明らかにしたいと考えています。

おわりに

以上、留学する以前のことについて述べてきましたが、次号以降で、研究のことだけではなく、アメリカとイギリスでの留學生活のことについても触れる予定です。私には、3人の子供がおり、幼い子供達を抱えながらの留學生活は、正直大変なことも多いのですが、単身で留學生活を送っている人とは違った視点で、こちらでの日々の生活を振り返ることができるのではと思います。

いわゆる先進国での留學や研修などについてまとめたものを読んでいると、日本とそうした国々とを比較して、「アメリカでは～」「イギリスでは～」と、その国の優れた点のみに焦点をあてて、「だから日本は～がダメである」と結論付けるものが多いように感じます。もちろん、そうした優れている（と思われる）点に学ぶということは大切なことですが、往々にしてそれらの点には、コインの表裏のように問題点も持ち合わせているものです。どの国にも長所と短所があり、ある視点からみれば長所に見えることも、別の視点からは短所に見えるということがあるので、どちらの国がいいかを決めることは意味がないと思います。

この連載では、そうした点を意識して、私がこちらでの経験を通して感じたこと、考えたことをサンプルとして提示することにより、読者の皆さんの考えるきっかけになれば幸いです。



York Minster①



York Minster②